2018年11月25日

福音書からのメッセージ

イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」
（ヨハネによる福音書18章34節）

今日は降臨節前主日です。教会の暦では、一年の最後の主日ということになります。一年の最後に、わたしたちはどのようなことを考えればいいのでしょうか。たとえば大晦日であれば、その一年に起こったことを思い出しながら、感謝したり、反省したりするでしょう。そして新たな一年にむけて、目標を定めます。同じように今日、一年最後の主日を迎えるわたしたちは、この一年に与えられたものを覚え、次の一年に向かっていければと思います。

さて日本聖公会では降臨節前主日として今日礼拝をしていますが、カトリック教会では「王であるキリストの主日」と呼ばれています。今日の福音書の中にも、ピラトとイエス様の言葉の中に王という単語が出てきます。当時のユダヤの人にとって、王という言葉には特別な思い入れがありました。彼らにとって王といえば、ダビデ王でした。彼らは、ダビデのような王様が自分たちの前に現われて、今の苦しみから解き放ってくれるのを待ちわびていたのです。救い主と王の姿とは、重ねて考えてられていました。

またローマの総督であったピラトにとっても、ユダヤの王が現れるということは大変危険なことでした。ユダヤの人々が王の元に一つとなって、反逆をおこされたらたまったものではありません。クーデターによって、今の支配関係がひっくり返ってしまったら、自分の身が危険にさらされてしまうのです。

しかしイエス様は、群衆やピラトが考えるような王ではありませんでした。イエス様は言われます。「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」。

聖書の中で真理という言葉は、イエス様や福音と結び付けられます。イエス様が語った「真理に属する人々」とは、イエス様こそが真理であることを知り、イエス様を受け入れた人たちのことを言います。その人たちのために、王であるキリストは来られたのです。しかしそれは、わたしたちが思い描く王の姿ではありません。

イエス様は王であるにもかかわらず、宮殿ではなく貧しい家畜小屋で生まれました。王であるにもかかわらず、立派な肩書を持つ学者ではなく漁師や徴税人を弟子にしました。王であるにもかかわらず、豊かな人たちと宴会をするのではなく罪人や娼婦と共に食事をしました。王であるにもかかわらず、触れてはならない病気の人に手を差し伸べ癒されました。王であるにもかかわらず、人々の罪を担い十字架へと進んでいかれました。

これが聖書の伝えるイエス様の姿であり、この一年わたしたちが感じてきた恵みなのではないでしょうか。喜びのうちに、新しい一年に向かっていきましょう。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/